

• 0 1 2 3 4 5  
• 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5  
JAPAN

於  
二  
八  
七  
〇

東  
學  
本  
圖

正  
學

繪本通俗三國志七篇卷之十

目錄

司馬昭破懿葛誕

于詮淮南死節

姜維長城戰鄧艾

孫綽廢吳主孫亮

繪本通俗三國志七編卷之拾

司馬昭破諸葛誕

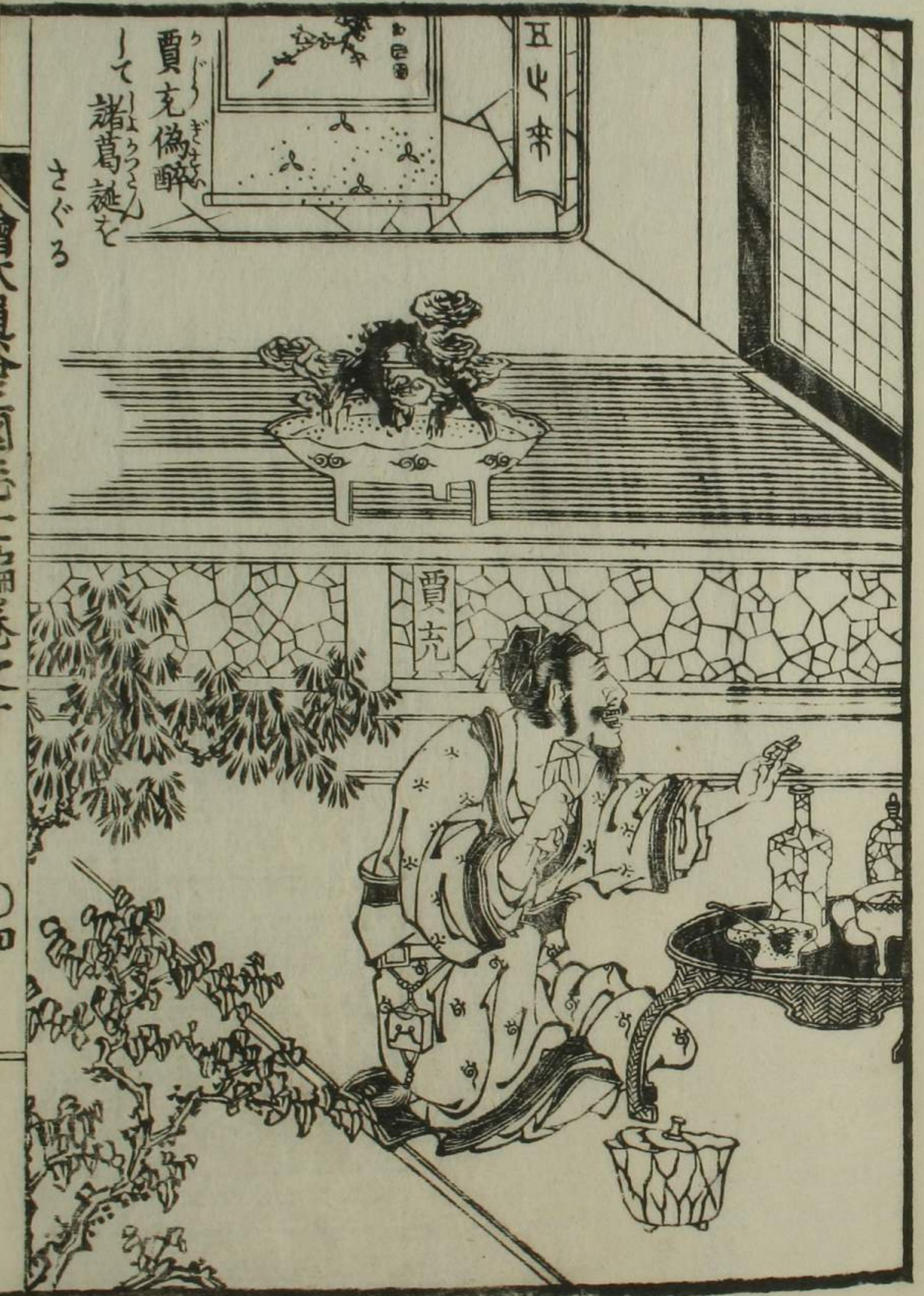
魏主曹髦正元三年改元。又甘露。號曰。景。又雍。及  
征西將軍陳泰。方。表。上。而。鄧艾。計。用  
蜀。勢。段。谷。打。破。又。告。司。馬。昭。大。  
由。魏。主。奏。鄧。艾。官。爵。加。詔。曰。  
逆賊姜維。連年狡黠。民夷騷動。西土不寧。卿等畫  
有方。忠勇奮發。斬將十數。馘首千計。國威震於巴  
蜀。武。色。揚。於。江。嵒。今。封。卿。為。鎮。西。將。軍。都。督。隴。右  
諸。軍。事。進。封。鄉。之。子。鄧。忠。為。亭。侯。乃。賜。黃。金。五。十。兩。  
甘。露。元。年。秋。九。月。日。詔。

ありより後司馬昭みびらる天下の兵馬大都督の官昇  
て常々きびく鎧たる精兵三千余騎を志とく。凡そ天  
下の政務ちの心のよき行ひけるゆ。魏主曹髦へ有ど  
も無べし。是より魏の位を奪へんとあらま。心切ぢり  
ども人の順よどきてを怕れ常々故建威將軍。賈充字  
公闇といふのを長史として。方へ心中の計を相議。  
あるとた賈充ひそり又來りて。やけろへ將軍いま天子の  
權をとりよし。魏の旧臣をあらだ心々疑とあはりのあらん。  
ひそりよしをながれきり。司馬昭曰く。我心も人の夷々  
ナナたと怕る汝。汝まへ東國下り。諭所の巡見。生たる体  
ヌズ。ひそりよ我を疑ひのあらう。伺ひ未且。賈充命を受先

淮南より下向して。鎮東大將軍諸葛誕。見や諸葛誕字  
公休。南陽の人。よく乃ち孔明。一族。孔明。蜀事  
て。生てあり。程へ。あり。用ひ。ひり。互ざり。孔明。死へ  
後。高平侯。封せられ。兩淮の勢を總て。吳の國の壓たり。  
賈充が巡見。下りたる由を聞て。又びらり迎へ。酒宴を設け  
てあり。持あは。賈充。醉たる体とよ。近比洛陽の諸賢  
魏の天子の懦弱と。君ともる。堪。司馬公の功德。天地  
ユ孙り。々く國を輔り。とゆいて。魏の禪を受て。帝位  
ユ即ち。ともじの多。將軍いきありひかりと云ひ  
れ。諸葛誕。怒りて曰く。御辺。賈豫。父の子。代  
魏の恩を被り。何とてさむの言を吐す。うべど。以の

外ちる氣色ちうけよ。賈充まくよ應じて曰く某う心い  
うでう此のとくちうべき。今諸人の所存と將軍よ語やす。  
諸葛誕曰く朝廷もし禍あらへ我まけ命を弃て恩を  
報せん安んぞ匹夫の上を犯せるは徒へん次の日賈充わら  
れて都へ回り右の由を詔けよ。司馬昭へられてナけろ。鼠  
輩たゞんぞ無礼ちう。吾うあらば之を伐ん。賈充が曰。諸葛  
誕々々淮南もありて人の心よく服を今も一招き上せと  
すよとも必び来るよ。若うのまくよて閣をきく。謀反  
せざとく。後大ちう害をあさん。不如いま使を遣して招き  
え彼を一趕く來らをんべ急又攻てせり。司馬昭が曰  
く。おの匹夫謀反せば我又行けり行て誅をとて先楊刀の

刺史樂琳が方へて書簡を送く。子の意を告ぎやうせ。  
うち淮南へ使を遣し。天子詔あり。諸葛誕と内裡  
よやく。司空の職を任す。ドリヒトひへ送る。諸葛誕をと  
きくより。必ず賈充が司馬昭を告て召すのあらんと思  
ひ。やがて使と捉く。拷問する。又使告てやけろ。某此  
てと奴をあらば。必ず楊刀の樂琳とあらん。諸葛誕が  
曰く。何をよ樂琳が志を。使告て曰く。此比書せ間でモ  
にて楊刀へ行たる人あり。諸葛誕の使と斬て。辛酉宴  
て殺けて手下の大將七百余人をあり。酒を勧てナけろ。我  
久く。此不ぞ守めて合戦の用意をあらば。近比をあくの武  
具を造る。今天子とセ。司空の職を任ぜんと。都へ



賈充偽醉  
して諸葛誕を  
さぐる

召すと。武具を造り。徒てことあり。汝六人。やうよ生立  
我。又志と。うて城外。又獵であせ。諸人。志うどーと。思く。  
坐立けり。諸葛誕。楊歎の城下。行く。入る。又南の門。尽く  
閉て。橋を引たり。いふ。大音あげて。樂紹。よきこり。我天  
子の勅命を受。雒陽。もの。おいで。司空の職。又。任せり。是故  
ユ。今日。獵の爲。又生る。不。何と。て門を固。す。謀。文の企  
あり。うと。呼。アリケヨ。ども。城中。又。ハ音。やせた。諸葛誕。兵を  
引て。東の方へ廻。くる。又。其門。も。已。又。閉。た。い。う。樂紹。元夫。  
あ。又。ヒ。此の。とく。ある。や。と。怒。く。兵。と。下。知。く。攻。せ  
け。また。手下の猛将。十騎。あ。す。馬。よ。飛。下。壕。渡。り。て。切  
崖の上。又。あ。ぐ。切。ど。射。ど。も。み。とも。せ。だ。卒。よ。壁。打。破。て

丈。よ。門。を。ひ。ち。き。け。き。バ。諸葛誕。兵。を。引。て。乱。ひ。入り。走。ち。り  
て。火。を。う。け。烟。の。下。す。転。て。ま。る。城。の。大。將。樂紹。よ。う。の。ゆ  
す。て。拒。ぎ。き。や。う。あ。う。し。う。火。を。逃。り。て。樓。よ。上。る。諸葛誕。  
げ。う。り。劍。を。抜。て。追。う。け。汝。が。父。樂。進。ハ。久。く。魏。の。大。因。心。を  
か。ふ。む。も。う。汝。の。本。よ。報。を。う。と。思。ば。却。て。司。馬。昭。又  
従。へん。と。す。く。ろ。と。呼。う。一。刀。よ。転。て。落。し。男。女。一。人の。よ  
さ。死。誅。して。樂紹。が。首。て。匣。よ。入。れ。表。を。そ。そ。て。雒陽。よ。上。せ  
け。る。その。表。よ。曰。く。

臣。綱。受。國。重。任。紹。兵。在。東。楊。歎。刺。史。樂。紹。專。訴。貌。臣  
此。與。交。通。又。言。被。詔。當。代。臣。位。無。狀。日。久。臣。奉。國  
命。以。死。自。立。終。無。異。端。分。心。紹。不。忠。輔。將。歩。騎。七。百。人。又

今月六日討紂即日斬首函頭驛馬傳送若聖朝明臣  
臣即魏臣不明臣臣即吳臣不勝殘憤即日謹表  
陳愚悲感泣血哽咽斷絕不知所如乞朝廷察臣至誠

謹表以聞

司馬昭を遣て大々怒り。時を移さば征伐せんと。兵  
を内にかけし。賈充が曰く。將軍父兄の業を受て天下の大  
權を執るとい人の意い。安うらぎ承ふ。一旦天子を棄て遙  
ぐと淮南下りゆ。都の内り事の変あり。後悔と  
も及まぬ。不如太后又奏して。天子とぞ又征伐志。是不虞  
の禍を拒ぐ。万全の計あらん。司馬昭が又もと同ト。郭太后  
又奏してナける。淮南の諸葛誕謀反を起して。樂綱を殺

一都を劫やくさんと。臣文武の百官と。その事と義とをよ。  
太后も天子も御駕みづから征伐しむ。などんべ容易に滅び矣  
ト。郭太后の威と怕として。兎も角も。汝が料ひと任をと  
云けど。司馬昭用意一と備り。次の日曹髦を精じて打  
立んと。曹髦が曰く。大將軍をでて天下の兵馬を總領  
め。自ら行て誅をきく。何ぞ朕と伴めて戦場へか。ひ  
んとも。司馬昭が曰く。む。武祖四海を縱横し。文帝  
敵をあくべ必び親ら征伐へり。陛下も先君の道了  
効にて。交賊を誅。何故又戦場を怕。且つ。之を曹髦を  
の威と怕として已とて得ぞ。打立けれ。司馬昭詔と

号して二十万の勢を負ひ。征南將軍王基を先鋒とし安東將軍陳騫を副先鋒とし。監軍石苞を左備とし。充忍の刺史周泰を右備とし。魏主を守護して淮南を進発し。諸葛誕の表をたててよりて後より壽春城を指す。發し。諸葛誕の表をたててよりて後より壽春城を指す。あり。十万の勢をもれりて楊凌よう新を降する勢四万をあふ。兵糧一年の貯でありて長史吳綱とひよのく。吳の國へ遣して長男諸葛覲を人質と送り。救の勢を求む。ものと見吳の國へ丞相孫峻をもと死して。從弟孫𬘭とりよの國の政を攝る。孫𬘭字は子通。生付強暴とて。大司馬騰。偏將軍呂據。王惇等を殺す。女を逆威と震ひ。吳主孫亮。うそて憂とりども爲べきをうほ。とたよ吳綱。石頭城に

行て。まづ孫𬘭を見。諸葛誕。蜀の孔明が族弟ちう。今已とを得たとして。魏の事ちうがる司馬昭。みたり。又權を執て。あざと殺さんと謀る。ものゆえ。吳と隨く。臣たらんとて望む。今長男諸葛覲を送く。質とて。極めて危きことあらべ救ひと云けど。孫𬘭大に喜び。をく。吳綱とりて。あ。即時。又全懼。全端で大将とし。王祚を後陣とし。朱異唐岱を先陣とし。文欽を案内者とて。七万余騎と三手をわけ淮南を行へ。援ひし。

干旌淮南苑節

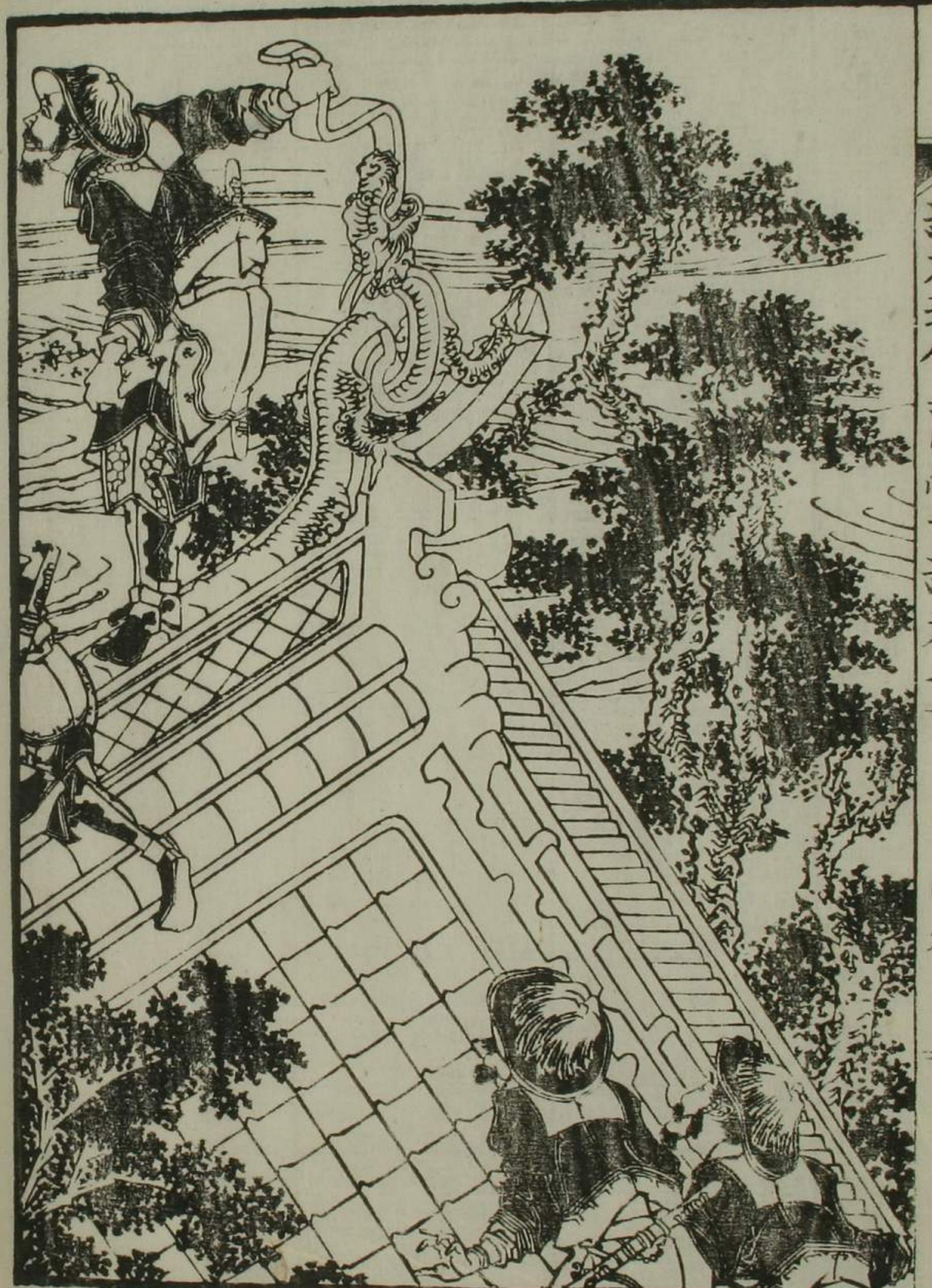
去程。又諸葛誕。吳の勢の救を得て。によく。怕る。不。ちく。討手。今や来る。と待とあらよ。司馬昭。二十万の勢とて下着

たると丈<sup>き</sup>一けど。一番<sup>2</sup>又吳の大將朱異兵を引て討て蒐る。  
魏の陣より先陣の大將王基馬を坐<sup>1</sup>て、二三合戦。朱異を  
さんぐ<sup>2</sup>打破けど。二番<sup>2</sup>又吳の大將唐岱入替<sup>1</sup>てたゞひ。  
ありも叶<sup>1</sup>ひでありぞ<sup>2</sup>べ。魏の勢勝<sup>1</sup>の<sup>2</sup>にて追蒐る。吳の勢<sup>1</sup>  
一合<sup>2</sup>てたかふと<sup>1</sup>りども尽く乱<sup>1</sup>て五十里<sup>2</sup>走<sup>1</sup>ひて陣<sup>2</sup>  
と<sup>1</sup>。司馬昭<sup>2</sup>吳の勢<sup>1</sup>の諸葛誕<sup>2</sup>を救<sup>1</sup>ひよーとき。急<sup>1</sup>き散騎長  
史裴秀<sup>2</sup>給事黃門侍郎鍾會<sup>1</sup>を呼<sup>1</sup>て計<sup>2</sup>を議<sup>1</sup>す。鍾會<sup>2</sup>  
曰<sup>1</sup>く。吳の勢<sup>1</sup>の諸葛誕<sup>2</sup>を救<sup>1</sup>ひ実<sup>2</sup>へ利欲<sup>1</sup>と耽<sup>2</sup>て。若利<sup>1</sup>をあ  
たて<sup>1</sup>て誘<sup>2</sup>きゆく勿<sup>1</sup>心<sup>2</sup>と破<sup>1</sup>そ<sup>2</sup>。司馬昭<sup>2</sup>曰<sup>1</sup>く。此の計<sup>1</sup>と<sup>2</sup>  
妙<sup>1</sup>す。石苞<sup>2</sup>周泰二人<sup>1</sup>に二手<sup>2</sup>と分<sup>1</sup>して石頭城の<sup>1</sup>たたら  
埋伏<sup>1</sup>せよ。王基陳騤二人<sup>1</sup>に後陣<sup>2</sup>と備<sup>1</sup>よ成<sup>2</sup>卒<sup>1</sup>へ先手<sup>2</sup>と進<sup>1</sup>

で敵<sup>1</sup>と誘<sup>2</sup>けとて。手分<sup>1</sup>とて定<sup>2</sup>り。陳騤<sup>1</sup>と<sup>2</sup>りよの<sup>1</sup>。牛  
馬車仗<sup>1</sup>と備<sup>2</sup>士卒<sup>1</sup>と恩賞<sup>2</sup>するものとがいとく積<sup>1</sup>て。後  
陣<sup>1</sup>と<sup>2</sup>從<sup>1</sup>とせけゑ魏の勢<sup>2</sup>とで<sup>1</sup>推寄<sup>2</sup>よーきちんけれん。  
諸葛誕<sup>2</sup>みげうち淮南の勢<sup>1</sup>を率<sup>2</sup>て。吳の大將朱異<sup>1</sup>と左<sup>2</sup>を  
え。文欽<sup>2</sup>と右<sup>1</sup>と備<sup>2</sup>と打<sup>1</sup>て生<sup>2</sup>魏の勢<sup>1</sup>の隊伍<sup>2</sup>を<sup>1</sup>整<sup>2</sup>す。  
えて是<sup>1</sup>ホの敵<sup>2</sup>へ一擧<sup>1</sup>と<sup>2</sup>打破<sup>1</sup>と下知<sup>2</sup>して。みげうち真先  
よ進<sup>1</sup>んで蒐<sup>2</sup>たり<sup>1</sup>。魏の勢<sup>1</sup>一戦<sup>2</sup>とも及<sup>1</sup>を。さんぐ<sup>2</sup>と進<sup>1</sup>  
走<sup>1</sup>る。諸葛誕<sup>2</sup>勝<sup>1</sup>と乗<sup>2</sup>て追蒐<sup>1</sup>る。又<sup>1</sup>忽然<sup>2</sup>と<sup>1</sup>一<sup>2</sup>邑の  
鉄砲<sup>1</sup>と鳴<sup>2</sup>て。二手の勢<sup>1</sup>打<sup>2</sup>て生<sup>1</sup>右<sup>2</sup>と周泰<sup>1</sup>左<sup>2</sup>と石苞<sup>1</sup>。哄<sup>2</sup>を  
造<sup>1</sup>て斬<sup>2</sup>て蒐<sup>1</sup>る。諸葛誕<sup>2</sup>大<sup>1</sup>もどろいて急<sup>2</sup>と退<sup>1</sup>ひとされを。  
魏の大將王基陳騤<sup>1</sup>大軍<sup>2</sup>を駆<sup>1</sup>て駆<sup>2</sup>て掩殺<sup>1</sup>す。諸葛誕<sup>2</sup>三方<sup>1</sup>を

れて。さへぐれり乱れたる有。司馬昭又討て生ければ残り  
さくあよ討とて。寿春城に逃れ。固守にて拒  
ぎ戦。そのとた。吳の勢へ安豐とどめ。魏主曹髦へ頂城を  
屯す。司馬昭へ壽春城の四方を囲む。息をも絶せば攻たり  
ける。ヒトニ鍾会。孫葛誕。打負て城中へ入る。之  
ども彼を伐兵、糧と事を欠く。殊と吳の勢が安豐と陣を取て。  
ともと掎角の勢ひとあれ。今まの城と。四方より囲む。り  
攻ると緩きとた。彼すあへち。固守にて生る。とあらん。も  
一攻ると急あらぐ。彼必に命を棄て戦へん。若吳の勢後よ  
り来つて内外より味方を攻べ。さと由て大事あり。志う  
ト。三方より攻て。南の方を囲ひ。との道より敵て走らう。そ  
して解て。三方より攻させ。土をあんて山を築き。その上に櫓

進封す。多く十分の利を得へ。推量する。吳の勢へ兵糧  
の用意を。我騎馬の精兵を引て。ひそかに其後を廻  
り。彼が運送の道を塞がれて亂る。司馬昭大喜  
び。我今子房を得たり。とて急と大將王基を命じて。南の  
圍を解て。三方より攻させ。土をあんて山を築き。その上に櫓  
を構ける。折ふ。淮水溢り漲りて。築山近く推流される。終  
城中より。声をあげて。めぞんよと嘲り笑ふ。吳の勢へ初度の  
軍と利を失く。安豐まであひぞきけれ。大將軍孫綽大と  
怒り。朱異。文欽等を責て。ナカム。汝尔の敵を破ると。あ  
ながちん。安んじて魏を滅ぼすことをほん。若ろま極めて打負を  
あら。汝ホグ。首を斬る。大将子誼をもみ生て。ナカム。今



壽春城魏の勢は圍んで城中の勢をもへ一同ありば某一手の勢を引て城中に入り共に力を併せて守るべし。諸大將(外より)敵を攻ひ某へ内より討て生ん志うる。魏の勢の勢度を失く敗亡をもと。孫綽(志)が全譯全端文銕子詮(志)万余騎を付て壽春城に入りむ。魏の勢あつてして俄の事ありべ大將の下知あきゆ軽しく戰ひ死。吳の勢南の門より城中に入ると司馬昭(朝)だけれど此定て内外より攻るの計ちうべとて王基陳騤(志)あのく五千余騎を投けて吳の勢のまゝまゝんぞり路(スチム)を走き敵きたゞぐ只そ後を圍めと下知をあは。是と並んで吳の大將朱異(志)が合図の刻限よりもちうべとて兵を發て魏

の陣へひりける。忽然とて後(後)と咲(咲)の色をあげ二手の勢路を横切て左は王基右は陳騤(志)を攻けり。吳の勢大はよ乱きて残少は討(志)安豐(志)も止り沿江の辺まで外けり。孫綽(志)怒り累敗の將(志)の用(志)立(志)とて鎧(志)里と云ふへ引(志)て卒(志)朱異(志)が首を斬る。うち唐客(志)よび寄り(志)壽春城の敵を解(志)べ來りて我(志)見(志)て。あれとひて自ら建業(志)回りけり。壽春城へ入ると(志)吳の大將全譯が子の全譯(志)と(志)。孫綽(志)が罪せんとて柏(志)と魏の陣を行く降人(志)と(志)けと(志)司馬昭(志)用(志)偏將軍と(志)此(志)よりて吳の勢(志)あかれて失ひ大半あり。ぞひて舟(志)乗(志)と(志)鍾會(志)あれと(志)えて司馬昭(志)す(志)ける。吳の孫綽(志)を(志)あ(志)ひて外(志)救(志)

勢は此城の四方を圍んで攻め入。司馬昭げゆもと喜び笑  
軍四方を圍んで息をも涙が止。攻戦へ射違る矢は雨のとく  
鐵砲を飛り石を投打て。蝗の飛より。あ城を。全禪あ  
らた。魏を降る。司馬昭が恩を感す。自ら一通の書簡を封  
じて。矢をさみ城中へ射入。父の全端をとて見る。  
今孫紹不仁。不仁にて妄人を殺す。若たの度の軍を仕損ト  
あべ一族尽く殺せらる。書た。魏を降る。城外の寄手ありと  
哉。吳の勢を千人を引て。魏を降る。ひそよ全禪と相  
て勢ひの内を攻へらんとしける。諸葛誕みけら攻口  
又生て指ぎたり。魏の勢は築山より上りて城を目の下に視  
下し。射手を揃てさんぐ。射る。城中もし。あと先條  
きたり。城中もとで。兵糧少しくて。久々守る。とあり。吉  
い。今吳の勢を一手合せて。城外又射て。生あらま。勝負を  
決した。若たのままで。城を守らべ。次第に力疲れて。自滅  
せ来る。あらんと云けれど。諸葛誕怒りて曰く。我とて下  
ち。首を刎へ。蒋班。雋。大。嘆て曰く。諸葛誕の滅び  
んと。我水を。魏を降る。一命を扶うらんと。其夜二更

大石をあげり。鐵砲をとぐ。一日一夜たりよて。両方の死入  
れをあらだ。されども寄手大勢よて。城中志どひ弱りけれ  
諸葛誕の内安からだ。とたよ手下の大將蒋班。雋。二人  
きたり。城中もとで。兵糧少しくて。久々守る。とあり。吉  
い。今吳の勢を一手合せて。城外又射て。生あらま。勝負を  
決した。若たのままで。城を守らべ。次第に力疲れて。自滅  
せ来る。あらんと云けれど。諸葛誕怒りて曰く。我とて下  
ち。首を刎へ。蒋班。雋。大。嘆て曰く。諸葛誕の滅び  
んと。我水を。魏を降る。一命を扶うらんと。其夜二更

の比壁で、踰て城を上。卒々魏の陣を行ひて降り人となる。  
司馬昭二人をもと用ひけり。城中の將士たゞへ志  
あくものも皆口を開て居たりけり。魏の勢へ四方より堤  
を築て淮水を擋ぎ山を築て城を攻けり。諸葛誕お  
れを見て水のみあきらめたら勢ひのりで射を  
もうす秋より冬の末まで雨降りとまあうりけふ  
也。淮水常よりも水少く鬼角ちる間。城中もてえ兵  
糧尽て倒立死とうるもの多りけり。吳の大將文  
人の子と一方を固て居たり。右てへ叶まだとて諸  
葛誕は告げやけろ。城中兵糧も盡りて兵士あらざる。  
りく引と触ば不如北國の勢を尽く。城外へ追手

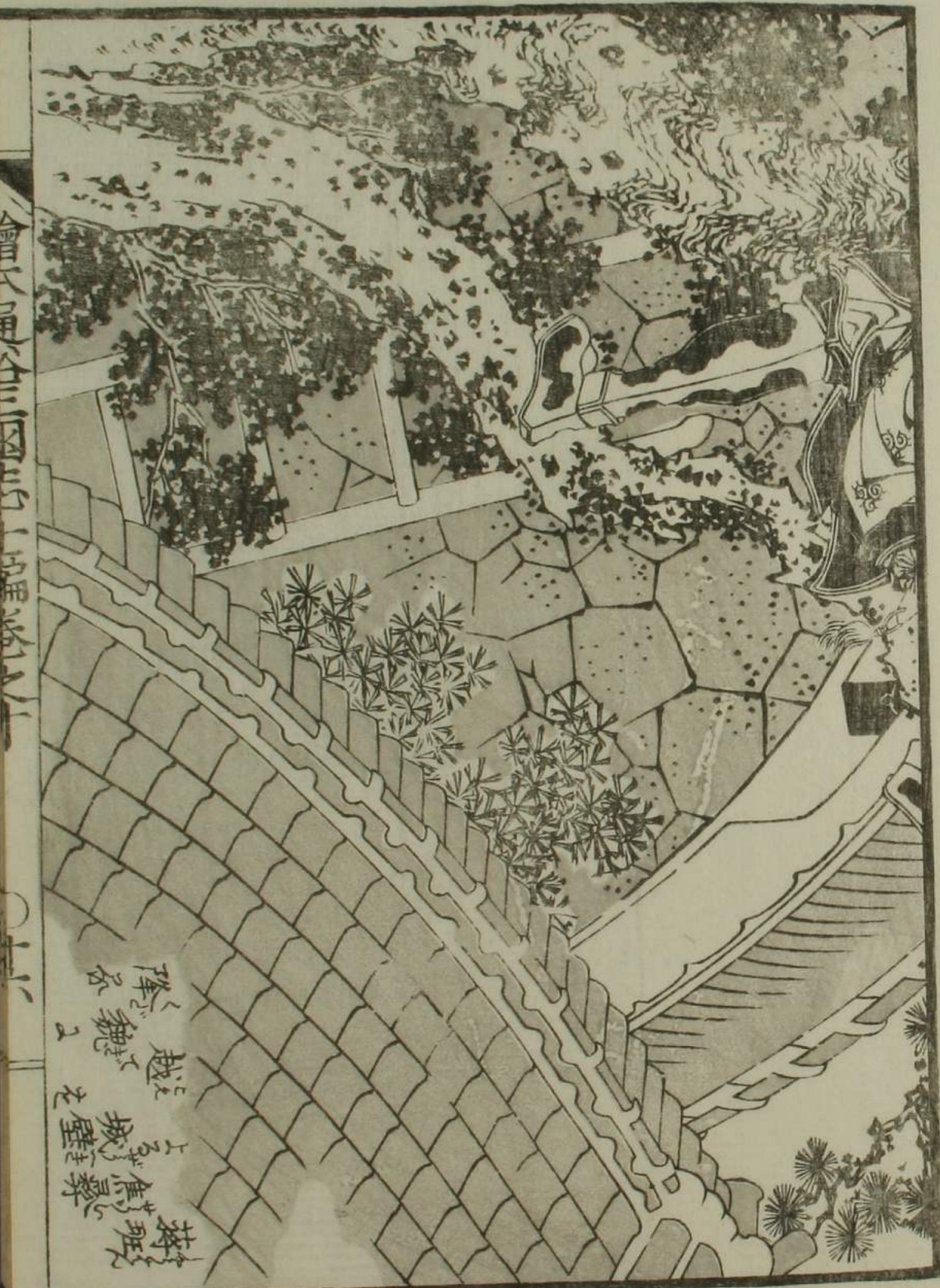
て。兵糧の費て省き。吳の勢をうるゝ。廻りて固く守らべ長久  
の計あらん。諸葛誕大怒て曰く。汝は手の勢を尽く生  
と。うち我を擒よせん為くとてかゝり生て首を斬る  
の子をも捉へんと。文鷺文虎父が斬きたるを文て怕立ぶ  
どころ。手下の勢を調けるを。諸葛誕大勢みて攻來り  
べ。二人を抜て喰て蒐り。近付敵二十余人をきり倒し。城  
を生へ魏に降る。司馬昭さきよ母丘倫を破りとて文鷺  
たゞ一騎大勢とけりて比類あき。举动をうらせたまむ。  
ムの内深く恨み。転て奪ひと云ふ。鍾會練て目く文欽  
父子。この罪容がうとやせども文欽の父諸葛誕よもさ  
れ。二人の子逃る。き路もとて来降る。今たの城はまだ落す。

降參の人をもろとば敵のふを固くすらあらだ外れ  
ざるをありて。余をとて拒ぐべ。司馬昭も又志とがへ。文  
鷲丸鹿をやして駿馬錦の袍をゆえ。偏將軍閔内侯  
封トけねば。一人持謝りて城の四方を打廻り。我ホ今まで  
の罪を宥され却て爵祿を賜たり。汝ホあよとても必ず  
降ざるぞと。よきりけど。城中の勢をとて。餓と苦  
と日久し。皆相集りて義とて曰く。文鷲ハ魏の大  
也。大うる仇ある人ある。今重く用ひらきたり。況んや我  
ホて用ひりぬと。有ドとして。三千余人志を合せて降  
らんと。諸葛誕を支付。日夜スゲタリ城を廻てくだ  
らんとも。もので斬死を。鍾會城中の変をありて。司馬昭

又見へ時とて又到り。まうりと攻えと。ひけり。司馬昭も  
内とも同ト。三軍の心を激しく。西面雲の下くと集衛。  
あやき叫んで攻けろよ。北の関戸を守る大将曾宣と云  
ゆの門をひらくて降人となる。是より。魏の勢多く亂立  
入り。諸葛誕力を失ひ麾下の勢校百人を引て城を  
生ける。壕の邊とて魏の胡奮と生合。一刀よ転て落さ  
れ。その勢尽く。生取とけり。魏の大將王基ハ西の門を  
攻入ける。吳の大將于詮も生あひ。ひそをみて降らざる  
とよびりけと。于詮怒りてやけろ。ハ丈夫の士主の命と  
免て敵。又むく。功とあはと能ひばりて却て他人を降ら  
ん。是禽獸の行ぢうとて。被たる盜をとめて地を抜きて。

人生在世得死於戰場幸とて。大勢の中又わけ入りて。三十余合戦ひ馬をでよ疲きけよべ。卒々乱軍の中え。斬死ふぞ志たりける。司馬昭をで城中みへりて。諸葛誕が三族を平げ。榜を生して民を安む。武士も諸葛誕が麾下の兵役百人を生取來けよべ。降るものへ助けんといふ。諸軍又あゆぐへ諸葛公と共に死せん。何ぞ敵又降るをきといへ。司馬昭又怒り。城外又引生して。一たげに詰問て降らんといひのあらば。助よと下知を遣す。武士どもまげ一人を斬死して。汝ホ又此のとくあるをきく早降と云けよども殺石人の者ども一く問て殺し尽そまで。降んやうひゆの一人もあうりけり。司馬昭あひて聞て心の内

感嘆して休ば。皆屍と一もよ墓らしむ。散騎長史裴秀きたり見てやける。ハ吳の勢いよ味方々降りども妻子一族本國又あひて後又ハ尽く心を変じ。不如皆坑スハと埋死。鍾會諫て曰く。古の兵と用ゐるもの國と全ちるとと上と。其悪人の張本と株をうち。已ハ尽く埋死。不仁の甚き。不如又本國又放して回らし。中國の寛大ちとあらし。司馬昭げよと同ト。是妙論ちとて。吳の勢と尽く回らし。ひさと大將唐岱。孫𬘭。罪せんと。あぐく魏事人と望けよ。司馬昭をあへち重く用ひ淮南す。又治りへ都へ回らんと。忽ち早馬急とつ



文獻卷之二

蜀の延熙二十年。あらたに景耀元年と改め。姜維、漢中より新、蒋舒、傅士廉の三人の大將をえらび、毎日軍馬を調練して、夏侯霸をもつて、御邊境に日、鄧艾へ少しだけも見ぬる。敵もあらば、と云ひて、我ある程のうらやまんと思ひ悔り、近づこうの計をもつて、初からどろく恨みの面をもつて、夏侯霸曰く、鄧艾、身の長七尺、闊面大耳、方頤大口、言語謇澁である。世の人呼んで、鄧玄と号す。姜維が曰く、我みが

ら、天下とよびらるのあらじと思ひ、志をもつて、鄧艾がそりと、又落とる心を誓て、その耻を雪ぐ。時々細作をくり、近比淮南の諸葛誕、兵を貢りて、司馬昭と伐人となり。吳の大將孫綽、あとで助けて、壽春城を植え、のち司馬昭をして滅ぼさんと爲る。魏主をもじる太后をとり、兩都の勢二十万を率いて、淮南を下すと告げ、姜維大喜び、事已成、就せりとて、表せられて、後主劉禅も奏聞し、兵を引いて、魏を伐んとし、中叢大夫、譙周、是由を聞いて、長く嘆き、蜀の勢と毎年師を立て、傷て病者數十をもつて、全く怨を含む。姜維、時の務をあらはれ、天を背て、志をもつて、常に酒色を溺れて、中

貴黃皓々どりの國の政を行ひ日夜あそび樂んぐ。下の憂て顧後國もとで又危一として仇國論一篇を作りて姜維<sup>い</sup>送る。姜維<sup>い</sup>披見<sup>ひみ</sup>よの論<sup>いわば</sup>曰く。

或問古往能以弱勝強者乎。伏愚子答曰有之高賢卿曰用何術以勝之。伏愚子答曰處大國無患者恒多慢處小國有憂者恒思善多慢則生亂思善則生治理之常也。故周公養民以少取多越勾踐恤衆以弱興強此其術也。賢卿又曰曩者楚強漢弱相與戰爭無日寧自然。項羽興漢約分鴻溝為界各欲取息民張良以為民志既定則難動也尋師追羽終斃項氏豈必由文王勾踐之事乎。伏愚子

笑曰賢卿止知其一不知其二也。昔商周之際王侯世尊君臣久固民習所傳深根者難拔據固者難遷當此之時雖有漢祖安能伏劍鞭馬以取天下乎。當秦罷侯置守之後民疲秦役天下土崩或歲改主或月易公鳥散驚獸駛莫不知所從於是豪傑並爭狼分虎列衣疾搏者獲多遲後者見吞方今之始皆傳國易世矣既非秦末鼎沸之時實有六國併據之勢故可為文王難為漢祖夫民之疲勞則騷擾之兆生上慢下暴則瓦解之形起。諺曰射幸數跌不如審發是故智者不為小利移目不下為己意以改步時可而後動數合而後舉故湯武之師不再戰而克誠

重民勞而度時審如遂極武蹟征士崩勢生不幸遇難雖智者將不能謀之矣若乃奇才變縱橫出入無間衝波截轍超谷越山不由舟楫而渡盟津者此伏愚之所不及也

姜維曰ありて又怒りあれ腐儒者の論ちうとて扯裂て地又弃兵て引て即時又打立まげ何より攻ノ人と議たるよ傳僉が曰く長城へ魏の兵糧を貯たる所之駱谷より沈嶺を超て長城を攻ぐの兵糧をやまとて駱谷より打ひく長城え司馬昭が一族司馬望と云ひの元より鎮守將軍又封ざられ此を守めて居より

蜀の勢寄ると聞て大又どろた王真李鵬といへ二人の大将をやしよせ此城兵糧へ多けれども勢をもは如何を乞と義一ナリベ二人あとて曰く某ホ承べぐる命をとて戦ひん將軍さとと泊とタヒト司馬昭とすらが打て生々支んとて二十里生て陣を取次の日蜀の勢近付けりと自ら王真李鵬と引て馬を出ひ姜維ありとて大音あげ司馬昭の主と軍中又移汝ある後篡逆の企ありん我今天子の勅命と受兵と引て罪と正汝もしもと降ぞんべこよ首を刎んと誓りけれ司馬望大又怒り汝ホ無礼みだりと上國を冒す刀の頸又望ひと侍りとゆて自ら鎗を拈く出けれを蜀の

大將傳僉馬とよどへて。十合あまり戦ひ。訴へて引退く。  
魏の陣より大將王真のうはと追來る。傳僉もと組ちの  
又睡んで交近くあうけろと死。引回してむかと組ちの  
と。奮と度馬の上みて生捉脛を抜んで回ければ李鵬馬  
を飛して追蒐る。傳僉もとと見て。十分又力と生じて。王  
真と地の上又あげきて四角ちう鉄の棒と持て李鵬が  
近付て刀をめけんと見る。不とさうえ引回して。盔の真甲  
と破よ碎よと打けもと。李鵬が眼逆り生馬も落て死  
と。又ける王真へ地と投られて蜀の勢又寸く又斬りしら。司馬  
望怕とがどろひて退くんと見る。姜維大軍を駆て攻う  
と。討るの麻のとく。もうく逃れて長城と逃れる。

姜維下知と下りて。大將軍令夜ハ尽く休み。明  
日早く又力と併く城を攻みて。一夜人馬を休め。次  
の日大軍尽く城を囲んで火矢を射つけ。鉄砲を打蒐  
り。城中あひて拒撃して。城の四方又乾けろ柴と積。一度又火を  
付たゞく。火燐天を焦りて。此城をや落ちると。そと  
りけり。城中又へ是ヒて。あめき哀む声休ば蜀の勢氣  
とのにて。壁を踰。逆茂木を破く。入る。時又いがくとも志  
ら。哄の色太又ひきけと。姜維馬を回して。是ヒてる  
又魏の勢旗を進め。浩々として。生来る。折へ後攻の勢きた  
まうと。きう又後陣を先陣と。みげうち馬と出しけ

れべ。魏の勢の中より。年の程二十あまりある大將鎗を提て。うけ生鄧將軍を走りやとよびり馬を飛して突く。蒐る姜維心の内より一定やて。鄧艾あらんとちゆい。みげくり馬をまよへて五十余合戦ひ。勝負さらゝ分れず。そく。姜維詐りて山路をとへて逃走り。彼大將逃さじと追うけるとた。引回して丁と射る。彼大將弦音を立てきり首を伏たり。鎗へありひひて遙々上と射ましけり。姜維後を顧る。彼大將をでぬ近付鎗を取返す。突ひとすれ、急よ身をとけて其鎗をひき奪ふ。あれよりそく。彼大將本陣をさへて走りけり。姜維をあへど嘆息。

可惜可惜といひて追うけ已。又魏の陣又近付たるえ。二人の大將身の長七尺あまりあるが。刀をひくさげて。ちぢり生姜維匹夫。子を追とあられ。鄧艾も又あり。鄧艾父子の鄧忠ちう。姜維心の内。又鄧忠が武藝をとよびりけり。姜維大ふあどろく。元來さきの大將へ感づ。又鄧艾と戦ふ。馬疲きて叶ドとあひ。大音あげて。我今日汝父子をとおきたり。共よ軍を休て。明日あらす。勝負を決せんといひければ。鄧艾も軍の利あきをえて答て。曰く。もとで此のとくあらば互に志がしく。軍を取らん。詣るとて大丈夫あらばとも相引く。引うちぞき。姜維へ。兩山によどがれて陣をと。鄧艾へ渭水よりそ聚

を下へ鄧艾子のち蜀の陣取の体と伺ひ司馬望と昏蘭を送りてナカルヘ味方よろしく堅固ニ守り生て戦ひば。関東より大勢のきたるを待て蜀の勢の兵糧又何まるを伺てきうニ三方より攻破らんニ勝ざとゆとあらうもば相構てよくく城を守りと云遣一司馬望小勢あれ行てナカルニ助けよとて鄧忠又鄂を分て城内へ入きしも早馬ヒヒと司馬昭又救を求む姜維へ戦書を下志て鄧艾と勝負を決せんといひけど、鄧艾いひぞりく明日戰人と答。姜維あとニヨリテ。敗夜の五更ニ兵糧を使暁より生て陣を張ひぬや来ると侍ニ鄧艾が陣ぢん鼓を休め棋を休て人ありとも見てば皆又及まで一人も生ざ

一。姜維もあく引回一。又戦昏と下へて紹又背ける罪を責。鄧艾子の使ニ對面して酒とのませ我きの少の病ありて紹又背けり。明日あら夜戦を決せんとあく。使之りそ。由を告られ。姜維又つぎの日乃早天より生て待けれども鄧艾昏もよども生だ此のとくちうて五六度又及びけど。傳食をきてゆける必に鄧艾が深き計。又ひん姜維が曰く。されば必ず関東より後の大勢とまゆいて我を三方より攻るの計あらし。我又げ呉の國へ書簡を送りそ。孫綽又魏を伐し。矢をとんで関東の勢ちとて救ス。又あらじとて已ニ使を出さんとさう早く早馬きなりを告ぐ。司馬昭すとえ淮南を平げて諸葛誕が三族を滅

王真



蜀の傳僉  
王真を授  
報り  
李鵬を  
頭一棒  
打碎く

傳僉

おほき。吳の勢も戦ひ負て。尽く魏（さき）又降り。司馬昭（おおさかずか）大軍  
を引て。あの不<sup>（ふ）</sup>と救<sup>（すく）</sup>。御用心あり。と報（ほう）され。姜維  
大<sup>（おお）</sup>もどろき。今たび魏（さき）を伐<sup>（うつ）</sup>とも。又画餅（ゑがひ）とあり。そや  
く退<sup>（ひき）</sup>くんよ志<sup>（し）</sup>。とて先歩立（いきだて）の勢をあり。とけ。騎馬乃  
勢と後陣とて。あがくと。退く。鄧艾（とうえ）とぞ丈て笑  
りて曰く。姜維今あり。大將軍の勢（せい）をきたるを知て。そ  
うあらば追（おと）とある。若追（おと）とぞ。彼（かれ）計（けい）。又中らんと。密  
々人を遣（し）く。そせしむ。案（あわせ）のとく駱谷（らくこく）の小路（こうじ）。孰（なれ  
素（す）と積置（つみおき）。諸人（しょじん）をあはれ。などろきけ。鄧艾（とうえ）曰く。是  
追手（おとて）を焼（や）。爲（ため）ちりとて表（ひょう）を上りて洛陽（らくよう）へ報（ほう）され。司  
馬昭大<sup>（おお）</sup>喜んで重く恩賞（おんしょう）を施（ほど）ける。

孫綽廢（おくる）吳主孫亮

吳の大將軍孫綽（おくる）へ淮南（淮南）破（くだ）て。諸葛誕（しょくかつたん）とぞ右うちへ  
全端（ぜんぱん）唐咨（とうし）王祚（おうそく）ホヘ吳の勢と引て。魏（さき）又降（こう）りぬ。とやく。  
大<sup>（おお）</sup>怒り。降參（こうさん）あたる諸將の妻子一類を悉く市<sup>（いち）</sup>牛と  
首（くび）と刎（きり）けり。吳主孫亮（さるりょう）常<sup>（つね）</sup>孫綽（おくる）が。又だり。と人を殺  
をとて。人の内深く怕る。或日孫亮（さるりょう）西苑（せいえん）と生て遊び。  
傍（わざわざ）ちる黃門官（こうもんかん）。又命<sup>（めい）</sup>ト<sup>（と）</sup>藏（くら）の中ある蜜漬（みつづけ）の梅を取  
まひらへ。壺（つぼ）と開て梅を生と。内よ風の糞（くそ）あり。やうそ  
藏（くら）の奉行をよび。何とて此のとくあるぞと責（せき）けれ。奉行  
答（とう）てやける。某常<sup>（もし）</sup>藏（くら）を守り。壺の口をぎびく封（くわ）と  
久<sup>（なが）</sup>を。糞の糞あり。生きまうひもだ。孫亮心<sup>（こころ）</sup>よき門と語り。是

へ。あらび奉行又恨ありゆの所為あらんとあるひ。の黄門官いへても汝又梅と求めてと。あうつけゑりく問又奉行あえて曰く。四五日以前又黄門官やこしよ梅と求む。志うども正丈て是と典ひて孫亮をあら黄門官と志うてヤけゑ。此鼠の糞へあらび汝が所為あらん。黄門官さうよ伏せだ。祭こきよのひにばと云けり。侍中刀玄。張邠二人ナケる。黄門官と。藏奉行と。やや不言の相違あり。獄又下して考問せん。孫亮曰く。獄又下と。さうでも有是である。極て易い。鼠の糞もとより。密の中又あらた。内外又布湿ひん。若い。能くへどたるあらべ内乾て外湿へん。とて剖破て見る。又果てて内へ乾きたり。此丈又黄門官。言

あくと罪又伏を。孫亮が聰明太極此のとく。日月の明るみ。どく。父とも孫綸四人の弟。共。又軍權と。抗。威遠將軍孫據。能く。孫綸四人の弟。共。又軍權と。抗。威遠將軍孫據。蒼龍宿て衛り。武衛將軍孫胤。偏將軍孫幹。長水校尉孫闡。尽く御林の軍一馬で司る。孫綸ハ朱雀橋の邊。おのと居處を構て。常々虛病して朝。又生。吳主孫亮。おとて。日夜心。安んぜ。黄門侍郎全紀。といふ。全皇后が父。とて。孫亮。又男ち。常々忠心せり。て事け。と。孫亮。との志。あり。ありとて。一人きたひて側。又うける。人。波。も。が。て告て。ナケる。孫綸。又だり。又逆威。震。罪をきえ。人。さう。朝綱。と。專。と。く。朕を艾。のとく。又軽んじ。今あと。除

ちんべ卒つゆ又うれい大おほちちる患いぬけをうさんだのめめ人じん又うれい卿きやう又うれい告くわいくわとときき將まつ軍ぐん劉りゅう巫みとと計けいをを謀ぼうけけ禁きん兵へいをを起おこてて城じゆ門もんをを固かためええ朕めいみみづづらら生うてて誅しよ伐ばつせせん此こととああああらら死しお汝ながが母は又うれい告くわるるととああああれれ汝ながが母は孫そん紳しんがが姉あね。若わ魂ま聞きるるととああああららへへ大おほ事こと又うれい謹きんでで輕うる々々下くだととああああれれ全ぜん紀きががひひく。臣おとこ孫そんががへへ此こ賊ぞくとと誅しよしてして御ご心こころとと安あんらら志しららん。陛下へままげげ詔せしめをを書かてて臣おとこ又うれい賜たまへへ勅てつ命めいあありりととく。兵へい招まくく従まささむむああくくらら死しお。孫そん亮りょうげげよよももととてて手て写うらら書かてて典てんへへけけきき全ぜん紀きままう家いえ回まわりり。此こ程ていの大おほ事こととと母は又うれい志しららとととも。父おとこ又うれい知しりりししととかかひ。家いえ又うれい父おとこのの全ぜん尚じょう又うれい諾のる。全ぜん尚じょうへへ是ぜ時とき大おほ常じょうなりり。此こ事こととと聞きててそその妻め又うれい告くわててややけけるるへへ天あま子このの詔せしめセえぬぬ。三さん月つきのの内うち孫そん紳しんとと誅しよ。其その妻めささららみみおおどどろろざざみみ体から了り。

ててひひそそううみみ人じんとと遣けんしし。弟おとこのの孫そん紳しん又うれい告くわ知しせせけけりり孫そん紳しん大おほ又うれいいいううり。四よ人のの弟おとことと召めしてて相あ競き。大おほ軍ぐんててゆゆりりてて内うち裡りをを聞き。全ぜん尚じょう劉りゅう丞じゆがが家いえとと取と卷まきてて一ひとものものたたききだだ斬な殺さ。孫そん亮りょうへへああるる川かわをを宮みや門もん乃の外そと。鼓つづのの吉よののひひくくををきき。是ぜのの何なん事ことぞと問たず。内うち侍し走はしりり來きりりてて歌うた。孫そん紳しん大おほ軍ぐんをを引ひいてて攻こう來き。孫そん亮りょうへへああるる又うれい怒おこりり全ぜん皇こう后こうとと罵のの。安あんがが父おとこ國こく家いえの大おほ事こととと誤まる。矣やいととああちち皇帝こうていのの嫡てつ子しだだ。且すこう命めい又うれい從まぐ。且すこう人じん朕めい位い。即そちちよより已既。又うれい五年ご。國こくのの人じん又うれい害いぬけ。又うれいささく。何なんのの愧くわいるるととうめめん。且すこう自じ由ゆ。且すこう戰たたかひひんんととてて劍けんをを拔ぬきき。且すこう半はん人じんととささる。且すこう皇后こうごう。且すこう臣おとこ。且すこう内うち侍し乳ちく母め。且すこうどりどりのののの裙ふくろをを引ひく。且すこう哭こき号ご。且すこう孫そん紳しん。且すこう文ぶん武ぶ。百ひゃく官かん。朝あめ。且すこう。今いま天あま子こ荒あら淫いん。且すこう病び多おく。昏くわい亂らん。且すこう無む。

道あり。我あるて廢りて新君と立んとも列れ。汝ふ志なれば  
ざるより必を反逆の心あるあらんと云けれど百官みあ其  
威を怕きて誰りあたぐざる心のひへんと答けれど不尚  
書桓彝をくみ生て曰く汝伊尹霍光が才もよくて安ぞ聰  
明の君と廢せんとする我たとい命を失とも賊臣又志な  
やと罵ければ孫綽をあど怒り。みびうちり劍を抜て首を切  
卒々宮中入て吳主孫亮をよび出。無道の昏君と  
その首を斬て天下の人々謝せんとふゆども先帝の恩を思  
丈々汝を貶して會誓王と反我別々徳ある人を君とせんと  
中書郎李崇又命してうちの玉璽を奪ひともせけれど孫亮痛  
哭して泣く會誓へおゆむきけ承文武の百官もとぞ見て涙

と流さぬといふりのち。孫亮とたゞ年十七歳ち。孫綽乃  
ち宗正孫楷中書郎董朝二人と虎林へ遣し。琊琊王孫休と  
ひえて太子とせんと。孫休は孫權第六子ち。虎林ありて或夜龍に乗て天へ上る。後と顧見ども龍の尾を引  
夢と見ておどろひて覺けぬ。次の日孫楷董朝二人きたる  
都よりとひけと。初へ心疑ひけるが事の子細で尋く  
て出來り。我へ手休とりのち。事久しくてうあらび度て天  
下喝したる。極へて陛下をもすゞ行ひと再拜して  
ゆけねば孫休とて謝りて布塞亭まできなりける。武  
衛將軍孫恩輩と備て坐むる孫休辭りて乗だをあ

と小車のつ又乗のりて入いせし。百官尽そぞく道みちの傍そば又拜まつ伏ふ。孫休車のより下さて答こた礼れい。けり。孫休まこと又迎むかて宮中みやちゆう又へれ。皇帝こうりやうの位のよ登のぼせて。傳國でんこくの王璽おうじと渡わた。百官尽そぞく萬歲まんざいと唱うた。大禮だいれい。りけり。天あめト又大赦だいしゃと行ゆきて。永安元年えいあんがんねんとあらため。孫休まことと丞せい相あい荆き州しゆの牧まき又封ほう。兄あの子こ孫皓まことと烏程侯うじゆうこう又封ほう。孫まこと紹さよく權けんを執つかて。一門いもん五ご人の諸侯しょこうあり。又御林ぎりんの軍馬ぐんばを司つか。冬ふゆ十二月じゅつがつ又至いたて。吳主ごしゆ孫休まこと左將軍さしょぐん張布さわふと使つかと。牛酒うしゆ。孫まこと牛酒うしゆと飲のて。大おほ醉よ。仰あおのけのけ卧ふて。向むか孫亮まことと廢わいせせ。大臣だいじんの家いえ又分ぶんち送おくり。孫休まこと張布さわふ又孫まこと休まこと又到いたけれ。孫まこと紹さよく牛酒うしゆと飲のて。太子だいしとあまんと處おと。我われ孫休まことと賢けんあるとあうて。卒そつ又立たてて天子あめのしと處おと。我われりおとひよく人ひとば彼かれ只ただ。

琊ら琊ら王おう又また朽果くわくべべ。今いまより後のち又また敬けいひ尊そんそん。我われあらば目めよりのこせんこせんといい。恨うら色いろ絶ぜつ。張布さわふ又また右うのあらじあらじきを告こげ。孫休まこと大おほ悲かなとて。人ひと日夜よる又また安やすらば。故のち日ひと死死。孫紹さよくかわしけ。中書郎ちくろう孟宗もんそうと天あめ將じょうととて。中營ちゆうえいの精兵せいへい二万五千にまんごせんと武昌ぶしょうへ生うれて。陣じんと取とせ。庫くらの内うち。武具ぶぐと尽つくく運はび。將軍じょうぐん魏邈び邈武衛ぶえ士し施朔しそくととり。又また二人ふたり孫休まこと又また告こげ。孫紹さよく兵ひと外ほかす。あら死死事じと起おき。孫休まこと又また張布さわふと召めし。孙紹さよく又また義ぎをを。又また張布さわふ白しらく老お將軍じょうぐん丁奉とうほうとと計そな。丁奉とうほうと招むかて。右うの事ことを語はる。丁奉とうほう歎たんく御心ごじんと安やすんどう。老お

臣一の計あり。國の為又害と除く。孫休問て曰く。いかる計ぞ。丁奉も曰く。明日へ幸え。臘日よりば、百官の宴會より事と託て。孫紹とも招き。臣又伏ら計をあまん。陛下よ。孫紹と謀せよ。とりへの詔と書いて下り。孫休ともえち手書き。書て典けられ。丁奉ひそかに魏邊施朔と外に坐て兵を調へ。張布又宮中の事と謀らしむる。夜俄々大風。走りて沙と飛。石を走らしめ。大木根も。枝で曉まで走りて少く走り。孫紹をでま起上り。座と起て行ふ。人の倒れ。少く走り。心をあへど怪む。太子勅使あり。今日へ臘日とて。百官と酒宴と巫相も速う。生て朝賀あり。と告げ。孫紹いそぎ車と乘て坐し。其妻をからす。

けろ。昨夜俄々大風起り。今朝又やあきえ倒れ。り。今日の會と坐す。今とあつれ。孫紹も曰く。今日へ百官の朝賀あり。我國の執權として。御材の軍馬へ兄弟とも。總司る。またの怕りあらん。方一事の変あり。も。府中。火の手をあげて知せよ。と云置。車のひて坐けれ。呉主孫休座を起て。ちとむ。孫紹も上座を譲る。酒宴とで。投刺も。よびけると。諸人を立際で。營外。火。坐たり。と云けり。孫紹も。孙休も。と。士卒多し。あれ程の失火。忽ち。打滅。と。左將軍張布。孙休も。劍を抜て。武士三十餘人を引て。おどり坐。詔あり。反賊を擒ふと。よびりけり。孫紹き

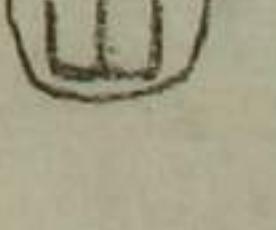


と出んとまる。武士どもかゝりとぢやて縄をうけよける。  
孫綽頭をりて地でなき。孫休の臣が命を扶け。交州へ  
あがて百姓とまゝとひはれ。孫休叱りて曰く汝きんぞ  
滕胤呂據と百姓はせばと殺したるぞ。孫綽又涙をみだ。孫  
がくへ一命を扶て奴とし。百官の使ものとまゝと云ければ。  
孫休曰く汝ちんぞ滕胤呂據を奴とあさるぞ。早く引生  
じて殺よと云けれ。張布をあら孫綽を市に生じてすこ  
まき。斬をのち吉をあげて罪孫綽一人もあり。餘の尽く宥すと  
よなりけり。内外を安堵てあり。吳主孫休みびくら武鳳  
樓と昇てて下奉ふと。又孫綽が四人の弟を生取きたる。  
をあら詔と下して尽く市に引生して殺せしも其三族を

平げ。兵又争ひて孫峻が墳を撲き。屍を生じて首を斬り  
る。諸葛恪。滕胤呂據罪ありて殺され。おもくその墓を封  
じて忠義をあらへ。遠國へ流され。ところの七召回し。百官又  
封賞ありて。國中すく沿りりけれ。薛翊といふ力を使とし。  
蜀の成都へ遣し。後主劉禪といふ同盟の交を結ぶ。後主  
も使と弛て賀を述べ。互に力を併せて魏を伐んと  
す。薛翊使して蜀より回りり。とを吳主孫休。蜀の様子と  
問ふ。薛翊答てやけろ。臣蜀へ行て。子の体を伺ひ。蜀は國  
へ。そや滅亡ふよん。近比中常侍黃皓とのつまみの讒佞と  
して權を執内外の政事。又己が人のやくと行ひ罪を罰す。常  
せられ功あるも賞せられぬ。すの詔赦のをまへてき。昔の十常

侍々超たり。人の死々百官尽く黄皓一人又阿リ。韜ひ己身のたゞよしと死て免うるんと後主へ昏して是をあらば。酒色も溺みて國の費を顧む。朝廷をこころに直言して君を諫承臣ちく。野外と見る百姓憔悴して顏色みふ菜の色よりも青ざめたり。臣古より聞へてあり。燕雀の堂より巣をくふ。子母相樂んで常々安らかとす。其家俄々失火ありて棟の焚火るゝ至るまで。燕雀怡然として禍の及ばずとあらず。今蜀の氣色ちとんど是々類せり。と語りけども。吳主孫休えをあそひて嘆じて曰く。孔明は生てあらば。争うが如き事あらんとて。又書簡て蜀の國へ遣し。今司馬昭権を執て魏主曹髦を小兒のとく輕んじ。且夕ようあら

むを變あらんと告げ。姜維大々よろおび。又師を坐して魏を伐んと議す。

皇都 池田東籬亭校    
東武 萬飾戴斗重  

浪花  
皇都

内山 曙治  
井上 兵衛

繪本通鑑三國志八編五卷 近日出放

姜維祁山八陣を布ゆゝ飛陽城をひし劔門關の大戰をあくゞぎ姜維勇防と云ふ天理うふ可取り時々鄧艾終り蜀都を奪ひ王濬主と吳都とて司馬炎三國と統一晋の世始て太平と唱へ至り

和漢書籍貯持處  
西洋

大阪心齋橋博勝町角

群玉堂河内屋 岡田茂兵衛

